

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏	河合 篤史
2. 審査委員	主 査：（兵庫教育大学教授） 岩井 圭司 副主査：（鳴門教育大学教授） 葛西真記子 委 員：（兵庫教育大学教授） 野田 哲朗 委 員：（兵庫教育大学教授） 海野千畝子 委 員：（兵庫教育大学教授） 松本 剛
3. 論文題目	識字学級に通う中国人渡日者の心理的援助に関する研究 ～ 共同生成される語りを通して ～
4. 審査結果の要旨	<p>学校教育実践学専攻教育臨床連合講座 河合 篤史から申請があった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記の通り審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成30年 7月 8日（日） 17時00分～17時30分 場所：兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス 演習室3</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>(1) 論文の構成</p> <p>第1章 問題と目的</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.1 夜間中学に通う生徒とは 1.2 識字学級に通う生徒とは 1.3 識字学級・夜間中学に関する歴史と諸問題 1.4 渡日外国人について 1.5 渡日外国人に対する排除の論理 1.6 渡日外国人のメンタルヘルスについて 1.7 識字学級についての先行研究の概観 1.8 渡日する中国人について 1.9 研究の目的 <p>第2章 方法</p> <ol style="list-style-type: none"> 2.1 ライフ・ストーリー研究について 2.2 共同生成される語りについて 2.3 研究対象の識字学級

- 2.4 筆者の立場
- 2.5 研究協力者
- 2.6 倫理的配慮
- 2.7 インタビュー手続き
- 2.8 分析方法

第3章 結果と考察

- 3.1 ケース1. Aさん（50代男性）の人生と解釈（研究1）
- 3.2 ケース2. Bさん（30代女性）の人生と解釈（研究2）
- 3.3 ケース3. Cさん（20代男性）の人生と解釈（研究3）
- 3.4 ケース4. Dさん（40代女性）の人生と解釈（研究4）

第4章 中国人渡日者の心理的援助の検討～転機の語りを通して～（研究5）

- 4.1 研究の目的
- 4.2 研究協力者
- 4.3 分析の枠組み
- 4.4 結果と考察
- 4.5 総合考察

第5章 結論

第6章 本研究の限界と課題

第7章 提言

（2）論文の概要

わが国の識字学級・夜間中学には、戦災や貧困のために学校に通えなかった人々を受け入れてきた歴史があるが、今日かつての困窮者とは違った人たちを対象にして機能しつつあるが、そこで行われている教育活動について教育学ないし学校教育学の観点から学術的に検討されたことはほとんどなかった。

本論文では第1章で、夜間学級・識字学級の制度的歴史を振り返りつつ、近年夜間学級・識字学級には「ニューカマー」と呼ばれる渡日者が多く通うことになっていることに注目した。渡日者に対して排除の論理が存在し、よって彼らに対しては心理的な援助が必要である。それには彼らの渡日後の生活と識字教室における学びの過程についての彼らの体験を明らかにすることが有用かつ必要であり、そのことを本論文の目的とする。

続く第2章では、上述の研究目的のためには、当事者の生の語りを取り上げる質的な研究が必要であり、先行研究を踏まえた理論的考察によって、そういった語りは聴き手との共同作業で生成されてくるものであることが明らかにされた。そして、本論文ではそれ見合った方法論として、「ライフ・ストーリー研究法」を採用することにした。

そのようにしてインタヴュー（論文著者）との半構造化面接の中で共同生成されたインタヴュー（研究協力者）のナラティブは、詳細に記録された後に、第3章でシーケンス分析を用いて解釈された後に、とくに彼らの「転機の語り」に焦点を当てた総合的な分析と考察が

第4章でなされている。

その結果、彼らの転機の語りは次の3種あるいは3段階に分節化出来た。①「渡日の決心」、②「日本での生活」、③「識字学級への参加」である。また、彼ら渡日者は、逆境にもかかわらず高い学習意欲を維持していた。

これによって、これまで不可視であった彼らが日本で生きる困難さを対象化し記述できたので、第5章で記述した。すなわち、

- 1) 渡日者にとって識字学級が「安全基地」として機能している
- 2) 彼らの語りは、先出の①～③の3つの転機で画期されていた。
- 3) この国が真に国際社会につながるためには、渡日者の公的サポート体制が必要である。
- 4) 彼らに見られた、教師と生徒がお互いを尊重しともに成長できる関係の構築が、日本の学校教育再生につながる。

第5章の結論に基づいて第7章では、識字学級で学ぶ渡日者への支援の充実と、そこで得られるであろう知見は、日本の学校教育の再生に大きく資することが期待できることを提言した。

2. 審査経過

(1) 研究目的と論文構成の整合性について

本論文は、識字学級で学ぶ渡日者に対する心理的支援が必要であるという問題意識に立って、彼らの生の語りから生活と学びの体験の実際に迫ろうとするものであるが、その際に、一方的な発話ではなく語り手と聴き手の対話の中で共同生成された対話を扱う「ライフ・ストーリー研究法」を採用することで、研究協力者の孤立的独我論的な体験ではなく、時間的空間的存在としての人間を描出することになっている。同時に、識字学級制度についての歴史的変遷をも含む文献研究を丹念に行い、今日識字学級で学ぶ渡日者を取り巻く状況を相対化しつつ、「場」に生きる人間存在の体験について、主観・客観のいずれかに偏ることなく、共同性・間主観性を軸にした研究となっており、そうして得られた知見が整理して記載され、考察に付されている。

このように、本論文では研究目的に添った適切な研究方法が採られ、そうして得られた知見が着実に記載され考察されており、論文として整合性の取れた構成となっている。

(2) 独創性と発展性について

近年の渡日者の学びの場としての識字学級を学校教育学の観点から学術的に検討した文献はこれまでにほとんど見当たらない。本論文では、そうした識字学級に通う渡日者の体験から、これまで知られていなかった彼らの生活の「転機」の構造をはじめて記述し得たことは、新規で独創性のある研究であると言える。また、次項以下で述べるように、今後の学校教育一般お

よびわが国の国際化のために資することができる知見が得られており、今後の研究の発展が大いに期待できる。

(3) 学校教育実践への貢献について

渡日者が逆境にあっても高い学習意欲を維持していること、および識字学級が彼らにとって「安全基地」として機能していることの分析に基づいて、わが国の学校教育の再生に資する知見が得られた。

(4) 社会貢献

国際化社会の到来の中で、今後渡日者に対する公的なサポート体制の構築が喫緊の課題であるが、本研究は渡日者の識字学習とそれに対する心理的支援という具体的な視点からこの課題に取り組んだものであり、社会貢献に関して大きな波及性を有するものと認められる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 河合 篤史 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。